様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 １７ 日現在

機関番号：６４３０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８４１７３

研究課題名（和文）商品としての工芸の経済的転位と付加価値の研究

研究課題名（英文）Craft as a commodity: Its transformation and additional value

研究代表者
松井　健（Matsui, Takeshi）

総合地球環境学研究所・研究部・客員教授

研究者番号：５０１０９０６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、工芸(品)の商品としての特異性に着目して、アジアにおける工芸(品)の生産、流通、消費のプロセスを分析した。工芸(品)は、他の消費材とは異なり、別種のマーケットを移動、転位することによって、実用品が、アンティークになるように、他の商品カテゴリーに移行して、付加価値が生じることがある。この意味では、工芸(品)は変身可能な、永遠の商品たりうる。このように通常の消費材とまったく異なる動きをする商品としての工芸(品)に着目することで、経済学や経済人類学がその理論的前提としている商品概念の再考が可能になる。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the peculiarity of Asian traditional crafts as a commodity. Crafts are transformable / eternal commodities, as they can transform from utility articles to souvenirs, and to art object in extreme cases. Thus they can get additional value. Observing the trail of transborder moves of crafts as commodities enables us to reconsider the basic theoretical premise of the concept of commodity in economics and in economic anthropology.

研究分野：人類学(anthropology)又は文化人類学(cultural anthropology)

キーワード：工芸　経済学　商品　転位　付加価値　経済人類学

１．研究開始当初の背景

工芸は、今日の社会状況においては、機械生産から取り残された、いわば後進的な産業の様態であるとみなされていた。さらに、生産業がサービス業へと移行する中で、モノとしての形態を持つ商品の生産そのものも、ポストモダン社会においては、過去の産業形態の残したものとみなされがちであった。しかし、その一方で、モノが過去の記憶や旅のスーヴニール（土産物）などとして、重要な意味を持つものとして、評価される風潮もあったし、ファッションやアートのシーンの中で、工芸が重要なファクターとして再発見されてもきた。

このような複雑な状況の中で、工芸を再評価する気運は高まってきたと思われる。一つは、機械化の進行の中で、人間的要素を多く含んだ生活環境の再構成の為に、工芸、特に手工芸品が重要と考えられるようになったことが契機となったといえる。人間的な生活のために、人間の手の作用がわかる工芸品の役割が再評価されたのである。二つ目に、高度な技術と大規模な工場でつくられる製品に対して、工芸品は、投下資本が少なく、原材料や加工のエネルギーが少なくてすむため、環境負荷が小さい生産業であり、地方的色彩があって、地方の振興に適していることが、注目され始めた。このため、工芸は、工業よりもより次世代的な生産形態であるとみなされさえした。

しかし、いずれにしても、こうした状況を正確に分析する為には、今日、日本を中心にアジア地域を中心に、工芸がどのように存続し、どのような役割をはたしているのかを明らかにするための、精確な情報が必要であることは、いうまでもないであろう。特に、グローバル化した現在のアジアにおいて、どのような工芸をめぐる事態が生起しているのかをまず見極める必要があるであろう。このため、グローバル化し、変化の激しいアジアの現在を把握する為の視座が設定されなくてはならないであろう。この要請を満足させるための研究の目的と枠組みの設定が、商品としての工芸という視座である。

２．研究の目的

本研究では、アジア地域における工芸をめぐる複雑な現象を、一つの統一的な視座から捉えることが求められる。それが、“商品としての工芸”という視点である。工芸が、自家生産自家消費されていた過去がないわけではないし、今日でも、狭い地域内で、一定品目の工芸が、地産地消される例がないわけではないが、ほとんどあらゆる工芸は、かなり広い流通域を持っており、多くは、国境を超える。時には、何回も国境を超える品目もある。そのため、流通と消費が、生産とは地域を違えることが“商品としての工芸”という視点からは前提とされている。

そして、工芸品が、いわゆる芸術品（アート）と違う最大の性格は、その使用、機能によることは、ここでいうまでもないことであろう。工芸品は、何らかの使途を持っていて、実用されるのである。しかし、今日のグローバル化したアジアの域内では、この機能性も検討されなくてはならない項目である。というのは、当初、はっきりとした実用、例えば食器として作られた物が、商品として遠くへ運ばれていく内に飾り物として扱われることすらある。日本でも、肥料の散布の為の籠が、食器を食卓に飾る籠になっていることすらあるので、何ら奇異なことではない。

ここに見るように、使用法の変化が起こることは、商品としての工芸が、その商品としてのカテゴリーを別の物に変えうることを示している。実用品が飾り物に、あるいは、スーヴニールへと変化するということは、工芸は、いくつもの商品カテゴリーを移り歩きうることを示唆している。そして、商品カテゴリーを転位するということは、、その間に、付加価値がつくことさえ意味する。もちろん、壊れて破棄されることもありうるが、例えば、古い布にみるように、美しいものと認定されれば、それはアンティークとして、断片でも高価に売買されうるのである。ということは、工芸品は、商品カテゴリーを転位させることによって、付加価値をつけて、くり返し生き返り、永遠の商品となりうるということである。古いアジアの布が、日本において茶道具の仕覆として高価に取引され、インカやコプトの布が、数センチ四方になっても高価なアンティークとして売買されるのは、極端な例ではあるが、工芸の商品としての性格をよく示している。ネパールの木工品、ラオスの布、インドネシアの絣布など、枚挙にいとまがないであろう。

本研究は、こうした“商品としての工芸”の特異性を明らかにし、それによって、アジア地域においてグローバル化する経済活動の特異な一面を明らかにしようとする。その一方で、工芸という特異な商品が地域振興などに役立つ可能性をもちうる理由を証明することを目指す。さらに、この作業は、通常の消費材によって代表される“商品”という物のイメージが、決して普遍的なものではないこと、多様な変化をとげ、商品カテゴリーを移行し、さらに付加価値をつけていく、工芸という商品のイメージから、商品という概念そのものを再考する必要があることを示すのである。

３．研究の方法

本研究は、グローバル化するアジアにおける商品としての工芸の運動をマクロスコピック捉える為に、以下のような方法を

用いることにする。ネパールのカトマンズ、インドネシアのバリ島という、アジア工芸の一次集積地を措定する。ネパール全土、インドネシア各地から、カトマンズとバリ島を経て、工芸が集まってくることから、一次集積地と呼ぶのである。そして、これらの物が、さらに、タイのバンコクに集められる。バンコクでは、さらに評価が行われ、その上で、欧米・日本へと出荷される。そのため、バンコクを二次集積地と呼ぶ。バンコクは、ラオスやカンボジア、ミャンマーなどにとっては、同時に一次集積地となる。

生産地で作られた工芸が、まず地方の市場や問屋によって集められ、首都の工芸品マーケットに集まり、主要な物が一次集積地に集められ、さらに二次集積地で認証を与えられ、評価されて、外国のマーケットへと輸出されるわけである。この過程において、どのように工芸品が、商品カテゴリー間を転位するか、どのような付加価値を得るかを明らかにするのである。これは、全て人類学的な調査というフィールドワークによって行われる。同時に最終消費地である日本の輸入業者の活動についての調査から、いわば逆方向に探索されることになる。すべて商取引の現場で行われるため、これまで長い調査経験とラポートを持っている研究代表者以外には、けっして容易な調査ではないはずである。

４．研究成果

成果については、まず各年次ごとの調査によって明らかになったことをまとめ、それを総括することにしたい。

まず、第一年次（平成 25 年度）については、ネパール、カトマンズとインドネシア、バリ島という工芸の一次集積地と、タイのバンコクというアジア工芸の二次集結地について、予定通りの調査を行い、それぞれに原材料、製造工程、生産地、価格、必要なロジスティクス等が異なる品目について資料を得ることができた。第一次集積地において、特に新しく、手工芸ではあるが、半ば、工場といってよい所で、かなり大量に作られる安価な工芸（多くは、持ち運びやすい軽量、小型のスーヴニールの品目となる）と、古いもので、一品物で稀少かつ高価な工芸（これには、家具、絨毯といった大きなものから、ビーズや装身具といった小さなものまである）との間に、大きな差異があることを確認できた。布、家具、装身具などについては、修繕やリメイクを通して、昔は前者であった工芸が後者となっていく様相も追跡できた。これらが、第二次集積地における、取り扱い業者の違い、商品としての性格の差異化、価格帯の分化をもたらすものと考えられる。アジアにおける工芸の生産地（あるいは、はじめて商品化される場所）に近い第一次集積地においても、その集積地に工芸品を運び込むミドルマンと、それを買い入れて、さらに第二次集積地あるいは消費地へと荷出しをする商人がおり、この間においても品物の経済的な場が変位し、付加価値が生じるという現象が認められた。工芸の商品としての経済的転移と付加価値の発生は、第一次集積地と第二次集積地の間だけではなく、より微分的に第一次集積地の周辺でも生起するものであることを確認した。

第二次（平成 26 年度）については、前年度の調査を継続して、精緻化する一方で、工芸生産のアジアにおける歴史的変化を概括することを試みた。特に、スーヴニールとアンチークというマーケットについても、調査を拡げた。以下のようにまとめられるであろう。工芸は古くから、地域の人々の衣食住労働にかかわる生活必需品を生産してきた。それは、物質文化の全般から、それを加工利用する活動の全てに及ぶものであった。しかし、産業革命以後、機械を用いる工場制の大量生産が発達するに及んで、工芸の活動範囲は、工業にとってかわられ、工芸は衰退を余儀なくされた。それでも、機械生産をおこなうことのできない狭い特殊な使途をもつ物品や、きわめて製作の困難な少量生産物については、工芸が今でも重要である。さらには近年になって、交通が便利になり、一方で経済的格差が広がるとともに、人々の移動が頻繁かつ大規模になった結果、ツーリズムが隆興することになり、かえって僻遠の地の工芸品が、単なる日用道具としての評価から、スーヴニールとして認められることになった。これは、工芸の商品としてのカテゴリーが、日用品から別のカテゴリーに移行したために、付加価値を生じさせた現象とみなすことができる。実際、経済的に豊かな国々において、富裕層の流行として、エスニック・アートのコレクションが行われるようになると、ネパールの山地やインドネシアの遠い離島においては、見捨てられていた古い民芸や手工芸の品物が、各地の集積センター（例えばタイのバンコクなど）に集められ、想像もされなかった高値で取引されることになった。採集されたところと、最終的に販売されるところでは、その価格に１００倍以上の差があることも、稀ではない。この現象は明らかに工芸の現在の状況をよく示しており、手仕事や手工芸というものが、商品として、それぞれの文化（と文化間の差異）で独自の運動をしていることを考える必要があることを示唆している。

第三年次（平成 27 年度）は、調査活動よりもむしろ、その理論的な検討を中心とした。以下のような総括が可能であろう。

本研究は、当初から工芸（品）が、商品として特異な性格をもつことに着目して

始められた。アジア各地域と日本各地における工芸（品）の商品としてのあり方をフィールドワークをとおして明らかにする一方で、それらを相互に対照することで、その一般的な含意を探ろうとした。現在最も顕著な工芸の変化は、一方において工芸が大量生産の工業製品に置き換えられることであり、もう一方において観光の土産品になっていくことである。いずれにしても、工芸は、２０世紀半ば以前のように、実用的機能的なものではなくなっており、アジア地域においては中国製の安価な大量生産品が、従来の手工芸品に完全に置き換わった。観光土産品としての需要は、同様に中国やインドからのツーリストの増加によって、大きな変化を工芸に及ぼした。

しかし、このような大きな潮流の中で、伝統的な手工芸品が独自の運動をしていることも明らかになった。それは、これらの工芸品が従来の生産・流通地域から遠く離れることによって、生産・流通地での従来の実用や機能とは全く別の商品となるという現象である。研究代表者は、これを工芸の経済的転位と名付けた。もし食事用のサジであったものが、鑑賞用に用いられ、数倍の値段で取引されるのは、好例である。これによって、工芸に大きな付加価値が付与される。

明らかに、この経済的転位と付加価値は、工芸だけにみられるものではないが、その顕著な特性である。それに焦点を合わせると、むしろ、従来行われた経済的な「商品」の定義を再考しなくてはならなくなる。「商品」の「寿命」が著しく長く、経済的転位によって、大きな付加価値を生じる工芸は、経済学に、新しいモデルを発想させる事例であることを明らかにすることができた。

以上のように、時季おくれな商品とみなされがちな工芸を対象とすることによって、現代の工芸が、商品としてきわめて特異な軌跡を描きながら、商品カテゴリーを横断して、付加価値を得、時にはグローバルコモデティとなることを示した。これは、商品という経済学の重要な方法概念について、再考するきっかけをも与えることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　10 件）

著者名：松井健
雑誌名：「目の眼」　　査読の有無：無
掲載論文の DOI：なし

① 439 巻　2013 年発行　p52-p55
論文標題「旅苞がたり(4)　民族のヨーロッパ」

② 440 巻　2013 年発行　p54-p57
論文標題「旅苞がたり(5)　つながりとしての沖縄民藝」

③ 441 巻　2013 年発行　p48-p51
論文標題「旅苞がたり(6)　バンコクに始まる」

④ 442 巻　2013 年発行　p 62-p65
論文標題「旅苞がたり(7)　花綵のインドネシア」

⑤ 443 巻　2013 年発行 p 58-p61
論文標題「旅苞がたり(8)　インテリアのレッスン」

⑥ 444 巻　2013 年発行 p 56-p59
論文標題「旅苞がたり(9)　「ものをぱくぱくと」

⑦ 445 巻　2013 年発行 p 62-p65
論文標題「旅苞がたり(10)　古物のワンダーランド」

⑧ 446 巻　2013 年発行 p 74-p77
論文標題「旅苞がたり(11)　リチョウ？ノー・モア！」

⑨ 447 巻　2013 年発行 p 68-p71
論文標題「旅苞がたり(12)　さらなる旅へ」

著者名：松井健
雑誌名：「民藝」　　査読の有無：無
掲載論文の DOI：なし

⑩ 745 巻　2015 年発行　p 51-p56
論文標題「書の工芸性についての補論」

〔学会発表〕（計　　3 件）

うち招待講演(2)件

① 学会等名：沖縄県民芸協会（招待講演）
2013 年 6 月 28 日発表
発表場所：ゆがふいん名護
発表者名：松井健
発表標題：「柳宗悦のいう「自然」について」

② 学会等名：日本民芸協会（招待講演）
2015 年 3 月 14 日発表
発表場所：日本民藝館（東京都目黒区）
発表者名：松井健
発表標題：「書の工芸性を考えるための若干のヒント」

うち国際学会(1)件

① 学会等名：The 9th International Convention of Asian Scholars
2015 年 7 月 5 日発表
発表場所：Adelaide Convention Center, Adelaide, Australia
発表者名：松井健
発表標題：「Cloth as an eternal/ transformative commodity」

〔図書〕（計　　1 件）

① 著者名：松井健　出版社：里文出版
2014 年発行　　総 227 頁
書名：「民藝の擁護」

６．研究組織

(1)研究代表者

松井　健（Matsui Takeshi）
総合地球環境学研究所・研究部・客員教授
研究者番号：50109063